

或る男

勉強熱心な男がいた。精読を常としている。

部屋の前に大木があり、日を遮るので、部屋が暗く、読みにくかった。

「自分の学んだことが真理であるならば、真実性の強さが、物象の奥義を徹し、現実を動かし、大樹の陰をなくすことができるであろう」

だが、時は無為に過ぎた。

老師が来る。

茶を所望した。

話を聞く。

「日照が欲しくば枝を剪るか、木を伐るしかない。真理も真実も実在も名称もなく、現実しかないということだ。

眼前のものが実在であろうが、名称であろうが、お前にとって日影が迷惑なら、手を動かすしかない。それが無空ということだ。

真理も無空もない、ないですらもない、ただ、これ、この、現実しかない」